二三　廣瀨中佐

一、神州男兒、數あれど、　男兒の中の眞男兒。
　世界に示す鑑とは、　廣瀨中佐がことならむ。
二、己に一たび死を期して、　旅順封鎖に向ひしも、
　事意にみたぬ無念さに、　再び結ぶ決死隊。
三、元より君に捧げし身、　妻も迎へず、子も持たず。
　父の寫眞と兄の文、　これぞ膚の守なる。
四、かゝる强將上にあり、　下に弱卒などあらむ。
　兵曹杉野就中、　中佐が無二の股肱たり。
五、上下心を一にして、　入るや虎穴の奥深く、

その大任は船底に、　積める石より尙重し。
六探海燈は稻妻か、
水雷は實に雷か、
中をひるまず悠々と、
行くや名におふ鬼中佐。

廣瀨武夫

七、かくて任務を果しゝに、わが兵曹はいかにせし。
姿も見えず、影もなし、あはれ、杉野はうたれしか。
八、杉野はいづく兵曹と、呼べと答は荒海に、
餅と聞くは砲彈の、船に碎くる響のみ。
九、三たび求めて、三たび得ず、かくては君も危しと、
促されつゝ本意なくも、小舟に移り乘らむとす。
十、時しもあれや、轟然と、耳をつんざく敵彈は、
血煙船に立ちこめて、中佐の姿はやもなし。
十一、五尺の軀の名殘なる、只一寸の肉塊は、
忠血・義血・俠血の、千古に朽ちぬ寶ぞや。
十二、あな、いさましの軍神。七たび人と生まれ來て、

わが帝國や守るらむ。　あな、いさましの軍神。

（巖谷小波、山櫻集）